

場所は、ラフやバンカー周りなど刈り込み回数が少ないエリアに発生する。チガヤに対するアンケートの回答は、「防除が困難であり、従来からずっと問題となっている」という答えに長年集約されていた。しかし、「防除が困難である」という回答がこの数年で大きく減少している。これは、除草剤抵抗性問題とは全く正反対であるが、チガヤに対して効果の高い除草剤が近年

登録を取得したことから、現地での対策が功を奏したものである。

我々が数百通りの処方の中から、芝への安全性と雑草への効果を両立するために知恵を絞ったり、散布水量やノズル、散布タイミング等を変えてみたりしても、除草効果の高い薬剤には到底勝てない。日本のように四季があり、多くの雑草が発芽を待っているような国で、永年作物である芝を対象に安全

性を担保しつつ、常に管理作業のストレスを受けているスポーツターフの中の雑草防除を行うことは、世界の雑草防除の中で最も難しいことである。そして、全国の防除業者は日々苦しみながら多くの課題を解決していると思う。是非、多くの方々の知識や問題解決に向けたサポートを受けながら、今後も抵抗性問題に向かっていきたいと思う。

田畑の草種

胡瓜草 (キュウリグサ)

昔こんな話があったそうだ。

村のはずれに河童淵と呼ばれる深い淵があった。ある夏の日、村の若者が馬に荷車を曳かせて河童淵までやってきた。あまりに暑く、馬の足を淵で冷やしてやろうと馬を淵に入れ、自分も涼しいところで休もうとすぐ側の草むらの陰に入り込み寝てしまった。するとそれを見ていた河童が、その馬を淵に引きずり込もうと足を引っ張った。馬はびっくりして河童を引きずったまま淵から飛び出した。飛び出した拍子に荷車が外れたが、馬はお構いなしに走り、自分の家の馬屋に飛び込んだ。

すると今度は河童の方がびっくりして、目の前にあった飼葉桶をひっくり返した。ひっくり返ったはずみに飼葉桶の中から2本のキュウリが飛び出した。河童は大喜びでそのキュウリをつかむと飼葉桶の中に隠れた。家の人たちは、若者が戻らず馬だけが帰ってきたのに驚いて馬屋をのぞいてみると、飼葉桶がひっくり返っていてその中からなんだかポリポリという音がする。不思議がって飼葉桶を開けてみると河童がキュウリを手にもって齧っていた。家の人「河童はキュウリが好物だとはい

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

うが、おまえ、こんなところで何をしている」といった。河童は両手を合わせて謝り、家の人「もうこんな悪さをするなよ。もうキュウリはやれんが、今度の春には淵の周りの丘に揉むとキュウリの香りのする草が生えるからそれで我慢しろ」といつて許してくれた。それから河童も言うことを聞いて、キュウリの香りだけで我慢するようになった、ということである。

キュウリグサはムラサキ科キュウリグサ属の越年草。史前帰化植物ともいわれ、全国の畑地、畦畔、路傍、空き地などに普通。冬季はロゼットで過ごし、春に茎を伸ばし背丈は15cm～30cm。花期は3月～5月、茎頂にサソリ型花序(巻散花序)をつけ、花が咲きあがるにつけ5cm～20cmに伸び、真っすぐになる。花色は淡青色～淡紅紫色、直径2mmほどでワスレナグサの1/3～1/4の大きさ。キュウリグサの名は、牧野植物図鑑に「生の葉を揉むとキュウリの香りがするから」とあるが、「植物記」には「キュウリグサの名がある事を知った」とあり、特に牧野富太郎が与えた名ではないようである。